

牛島春子の引揚げ文学

一三八

鄧麗霞

はじめに

戦争によって唐突に建国された「満洲国」は、再び戦争によって唐突に瓦解を迎えることとなった。かつて「満洲国」に理想を持って渡った日本人は、敗戦後逃亡し、祖国日本へ引揚げる。一九四〇年代後半から引揚げ体験を書いた手記は、藤原ていの『流れる星は生きている』をはじめ膨大に存在し、大きな反響を呼んだ^①。

一方、引揚げの研究は文学面において盛んになることはなく、引揚げ自体が忘れられる傾向にあった。そうした背景において、朴裕河が「引揚げ作家」、「引揚げ文学」といったジャンルを打ち出したことで、注目を集めたのは記憶に新しい。「日本の戦後文学に植民地・占領地体験とその後の引揚げの体験を素材とした表現者たちの試み」という「引揚げ文学」を定義付けようとする朴は、「引揚げ文学」という指摘が一九七〇年代に存在したことを発見し、忘却された言葉として現代に再提起したのである^②。また、朴は植民地出身、あるいは幼少期を植民地で過ごしていた五木寛之、湯浅克衛、尾崎秀樹、安部公房などの作家や研究者を挙げ、「敗戦当時の少年少女たちこそが、引揚げ文学の主役^③」だと考え、「少年・少女」、或いは「子供」たちの表象された引揚げ文学に重点を置いている。

しかしながら、現在まで未解決のままに残された「戦時性暴力」の間

題や、「残留婦人」の問題を見てみると、引揚げの問題は何よりも女性の問題であり、「引揚げ文学」を世代で区分して読むよりも、ジェンダーの概念を踏まえた上で読み返す作業が待たれている。このような前提のもと、本稿は、牛島春子の実体験をもとに書かれた引揚げ作品を取り扱い、女性の引揚げ体験に注目することを通して、「敗戦」が「植民地」における女性にとって何を意味するものであったのかを検討する。

一、牛島春子の引揚げ

「在満作家」として知られる牛島春子^④は、満洲に渡ってから引揚げるまで、足掛け一〇年間「満洲国」在住の経験を持つ。牛嶋晴男と同じく「満洲国」建国の情熱に燃え、結婚に至った同志であった牛島春子は、政治上の問題に関心を寄せていたことが窺える。満洲文壇デビュー作となった「王属官」（『大新京日報』、一九三七年五月）は、農村における不正な徴税行為を暴く前途有望の満人官吏が描かれて、満洲建国記念文芸賞を受賞した。夫の仕事に取材した作品「祝といふ男」（『満洲新聞』、一九四〇年九月）が芥川賞候補になってから、牛島は「在満作家」として、日本でも評価されている。牛島の著作が日本内地、また満洲の中国人に向けて紹介される時、特に政治上の身分が強調されている。例えば、山田清三郎編『日満露在満作家短篇選集』（春陽堂書店、一九四〇年一二月）に収録

二、特権的立場からの反転

本章では、「アルカリ地帯の町」についての考察を試みる。一人称で書かれた「アルカリ地帯の町」は、敗戦前の一九四五年八月一日の疎開から敗戦にわたる集団逃避行を語る。ソ連軍が新京（長春）にあと四〇時間迫ってくると言われたところで、「私」が子供三人を連れて新京から疎開列車に乗り込む。しかし、途中の奉天（瀋陽）で「私」と三人の子供だけが下車し、営口に向かう列車に乗り換えて、協和会館で敗戦を迎える。敗戦後、「日本人は五時間以内に営口市外に退去。違反者は銃殺」というソ連軍による突然の命令で、百人余りの集団逃亡が始まる。途中で偶然友人一家と出会い、一緒に瀋陽に移動し、友人宅に身を寄せる。主人公の移動は、「荷物を背負って子供をつれた女ばかり」の疎開者たちが、疎開列車を待つ場面から始まる。在満日本人男性が、続々と応召され、女性と子供ばかりが残されたという敗戦直前の状況が窺える。そこで、疎開者が「特権階級」と「女性」二種類に分けられるようになっていく。

駅前の広場を埋めた女の疎開者たちはじりじり日に焼かれながら何時間も汽車の出るのを待っていた。その群れの中に軍用トラックが何台も割りこむように入ってきて来てコンポーした荷物をどんどんホームの方に運んでいった。それは日本軍の将校の家族の荷物だった。将校の家族たちは通化の方に疎開するので、その汽車が出ないうちは、広場を埋めた疎開者の群れは疎開列車に乗れないのであった。（『アルカリ地帯の町』『牛島春子作品集』二七四頁）

夜半の一二時に乗車命令が出たが、「真つ暗な中で乗車しようと揉み合

う女と子供の叫びや泣声や引率者たちの怒号でホームは凄惨なばかり」という混乱が起きた。その理由について、満鉄の疎開列車に、階級による序列が作られた事実が、引揚者の証言から確認できる。元満洲出版配給協会理事長田中総一郎の回想によると、「軍の命令は、軍以外のものは、満鉄、政府、各特殊会社の順で、新京から家族疎開を」するということで、また、運転計画によって割当てられた列車数がまったく不十分で、満鉄に対して、連絡も不十分なため、「疎開は悲劇的な大混乱」になったという。

主人公は応召家族として疎開するため、特権階級に属すると一応は言えよう。しかし、幸いにも疎開列車に乗ることができた女性たちを待つのは、疎開先さえ不明な前途であった。

何処へ向かっているのか誰にも判らなかつた。引率者にさえ判らないというまことに奇妙な疎開の旅であった。引率者に判っていることといえば多分この汽車は鴨緑江を越えるだろうということ位であった。無論運ばれていく女たちはそれさえも知らないでいた。（同前、二七五頁）

疎開の行き先が分からないどころか、運ばれていく女性たちに対する敗戦後の処置さえ、つまり、引揚げの対象になるかどうかは、敗戦の当時は不明であった。『引揚援護の記録』（引揚援護庁、一九五〇年三月）によると、日本人の引揚げを裏付ける法的根拠は、一九四五年七月二六日にアメリカ合衆国大統領、イギリス首相、中華民国主席の名において大本帝国に対して発されたポツダム宣言の第九条にある^⑩。しかし、その条項は「降伏軍隊についてのみの規定であって、一般居留民の帰還については、何ら根拠となるものではない」と考えられていた。それ故、「軍人

軍属以外の一般在外同胞が全面的に祖国へ引揚げねばならぬかどうかという問題は、当時不明であった。否、政府としては、事情の許すかぎり、多数のものが海外に残留することを訓令したのが実情である^⑫。その事情を説明したものは、一九四六年九月七日に行われた対日理事会議長、連合国軍最高司令官外交顧問、ジョージ・アチソン大使の声明がある。「一般日本人の送還は、全く人道上の理由によってなされたもので、総司令官の義務としておこなったものではない」という。

引揚げと同様に、敗戦直前の疎開も、日本側がポツダム宣言の内容を把握した上で、堂々と軍家族、満鉄、政府、特殊会社を優先的に移動させたのである。疎開によって、日本人権力者と非権力者の対立構図が露呈されている。「アルカリ地帯」は一人称小説であるにもかかわらず、疎開女性のことを語る際、「私たち」の代わりに「女たち」が使われており、「運ばれていく女たちはそれさえも知らないでいた」と、「女たち」が他者化されている。「私」と「他者」の間に置かれた距離感に、物事を熟考する主人公の慎重さや、不安な気持ちが含まれていることは勿論であるが、それに加えて特権階層の一員またはインテリの優越感も読み取ることができるとして、列車が奉天に着く時、「私」だけが子供を連れて降りる。

そこで奉天の友人一家と一緒に疎開しようとするが、友人が乗る「有蓋貨車」は、国策会社の家族が専用するため、主人公が営口にある協和会本部に身を寄せることになる。協和会からの馬車で迎えられ、まっすぐに営口にある協和会事務長の会館に到着する主人公は、そこまで、まだ官吏夫人として特別な待遇を受けていることが分かる。

協和会会館で、八月一五日の玉音放送を聞いた主人公は、泣き笑いしながら敗戦の現実を認める。協和会は「満洲国」の「五族協和、王道楽土」という建国精神のもと発足された、官民一体の国民教化組織で、文

字通りの「民族協和を実現し、国民生活を向上し（中略）建国理想の實現、道義世界の創建を期す」という綱領を持つ。しかし、協和会の理念が敗戦によって有名無実になったことは、梶井事務長夫妻が臆病で利己主義の持ち主のように描かれていることから分かる。敗戦の夜から、協和会公館の隣組では、警備隊が作られた。事務長は協和服を着込んで、腰に拳銃をつり、格好よく夜警に出たが、大きさに仕事ぶりを構えただけである。

数日後、ソ連軍が営口に入ってきた。日本人退去という命令が出された時、事務長はパニックに陥り、梶井夫人に怒鳴りながら、逃げ出す準備を催促する。そこにやってきた事務長の部下が、「こういう非常の際こそ、あなたは部下の留守家族を保護する責任のある人ではないですか」と詰問する。その青年のことを、「私」は「五族協和や王道楽土の實現のために命でも投げ出しかねない生まじめで一途な青年」と形容し、「心を打たれ哀しくなってしまう」と述べている。「満洲国」の「王道政治」に適応し、「建国精神」を支えてきた協和会に、「私」はこれまで期待を抱いてきたから、そこに身を寄せたのである。しかしながら、敗戦にあたる事務長のあらゆる醜態を目の当りにした結果、「私」はその建国神話の期待が幻想であることを知るようになる。

その青年が率いる百人以上の避難隊伍は、先頭に中国旗を高く立て集団逃避が始まり、そして意外に「落ち着いて整然としている」ように見えるのである。

それに中国の旗を掲げて秩序ある行動をとりながら立去っていくという事は勝利者への尊敬、恭順、そういう意味をもつ礼儀として通用したのかもしれない。 (同前、二八一頁)

指導民族と名乗った日本人が自主的に中国の国旗を掲げるのは、やや皮肉であるが、そこに描かれたものは、生きるという本能に突き動かされた在満日本人の有様である。「満洲国」が崩れた後、在満日本人内部のさまざまな序列が崩れ、彼ら全体は同列の引揚げ者たちとなっていく。面白いことに、疎開の時の「他者化」表現と異なり、その序列関係が機能しない避難隊伍を語る際、「私たち」、「私たちの集団」という言葉が使われている。そのような言葉遣いから、「私」の意識における変化が見られる。つまり、主人公の「満洲国官吏夫人」という特殊な身分は、そこでは完全に崩れてしまったのである。

三、ジェンダー規範束縛から脱出する

次に本章では、一人称で書かれた「ある旅」について分析する。集団逃避の隊伍が解散した後、「私」は再び友人一家と出会い、一緒に瀋陽へ出発する。友人の家で男に保護を求める奥さんたちは、毎日兵隊に捕まる恐怖に包まれている。昼間防空幕を張りめぐらした部屋の隅で、夜寝床の中に潜り込む日々や、更に自分が厄介者として扱われた寄宿生活が嫌になつている「私」が、「冒険的」に一人で外へ出ていく。外の旅行案内の事務所まで、新京へ行く同行者を集める。すぐに貧相な四〇男、髯を生やした三〇男、快活な青年、眼鏡の三七、八の男、小柄な奥様風の女を含む五人の仲間と出会い、疎開の時と逆方向の長春へ移動を始める。二〇日間にわたる寄食及び恐怖の生活から脱出する移動は、「ある旅」に描かれている。

敗戦後、日本人が一番恐れたのは、一方的に「日ソ中立条約」を廃棄して参戦したソ連軍である。牛島の小説では、戦時性暴力の被害を受けた実際の事例は描かれていないが、ソ連軍に関する「銃殺」の噂や、接

客婦を狩り集める噂が触れられている。その恐怖に囚われた四人の女性たちは、いざと言う時にすぐ床下にある隙間に隠れるように、準備しており、三人の男たちは女性を守るために、毎晩麻雀に夜明かしている。警戒が物々しくなつていくなか、「私」は息が詰まるような日々には耐えられなくなる。それ故、「私」は、「私はもうこわがりごっこはいやになつてきたわ。本当に兵隊がその気になつたら男つてとても防せげるものじゃないと思うわ。(中略)私一人でしょう。あんたの方も一緒にひき受けてあげるわ」と、兵隊に無理やり連れられる場合、みんなの身代わりとしてついていく考えを、友人の茂子に告げると、日頃から家庭内で虐げられた茂子は、憤りを投げつけるように自らもついていくと述べた。

「判つたわ。私もいくわ。でも私死なないことよ。死ぬもんですか。」茂子は何物に向かつて憤りを投げつけるように云つた。

「そう英介に云うわ。私をかばおうとしたらあなたが殺されるのだつて。」茂子はそれを夫への献身だと信じて云っているのだ。けれど私にはそれが茂子をつないでいる鎖——絶え間なく彼女をこづきまわす姑と先妻の子と、それに対して茂子をかばってやる術もない孝行者の夫への—— 反逆であることを知っていた。でないなら、「私死なないわ、死ぬもんか。」と云い放つた時の彼女の目が、どうしてあのように暗く憎悪に燃えるだろう。茂子は自由を欲しがっている。
 (『ある旅』『牛島春子作品集』二五〇頁)

自主的に兵隊に付いて行くことを恐怖からの解放と考えている「私」に対して、茂子は夫への「献身」または「報復」と考えている。夫のために「貞節」であるべき身体を、夫が殺されないように敵に汚してもらう、という茂子のロジックであるが、妻の身体を夫の所有物とする男権

的な考え方は、彼女の中で内面化されている。妻に求められる「婦徳」のような言説を、茂子が無意識的に逆手に取る形で反逆するのである。しかし、それは賢さでも偉さも何でもなく、家庭生活で抑圧された女性の自暴自棄的な行為に過ぎない。ここでの友人は、引揚げ作品「笙子」の中で、笙子という別名で登場する。「笙子」では、「私」と笙子との「あざなえる一本の縄」のような友情と運命が語られている。笙子は不幸を伴う恋愛や結婚を経験し、また苦労を重ねた引揚げ生活を耐えていた。茂子の不自由な生活は、「笙子」の中で次のように描かれている。

川瀬家の台所にはいつも魚や卵など豊富に用意されてゐたが、そうしたものには笙子を除いた他の家族がたべるのであった。笙子だけに真黒い米と漬物で食事をした。

(中略)

お母さんも川瀬氏も、笙子の体に対して冷淡であった。「寝てゐるもんは楽なもんや」とお母さんはあてつけがましく云ひ、「自分のだらしなさが、自分で病気を作っているのだ」と寝てゐる笙子を罵る川瀬氏であった。私は私の部屋の壁に、上の男の子らしい筆跡で、「父の名は啓三、母の名はアヤ子」と書き落としてある(中略) 一度として笙子を母親らしく扱ったことはないやうに見えた。(「笙子」同前、二二五頁)

笙子は「私」より一足先に日本に引揚げたが、帰国した直後に病院で命を落とすこととなる。姑と夫の間に挟まれた友人の惨めさに対して、「ある旅」では、「茂子だけの責任ではないと同様、茂子以外のものだけの責任でもない気がして、私はよくいらいらしたものだ」と述べている。では、その責任はどこにあるのか。

大東亜戦争が勃発されてから間もなく、「全満唯一の女性文化誌」と宣伝された『女性満洲』が創刊された。創刊号に載せた「大日本の女性に期待するもの」(満洲婦人新聞社、一九四二年一月、一頁)という文章に、在満日本人女性に求める女性像が確認できる。

此時此際、家を守り国を護る隠れたる大きな力となるものが大和女に課せられた務めです。謙譲清楚なること谷間の白百合にも似ていささかの不平もなく足ることのみを知って世俗の名利名聞から隔絶して居る姿は、働く、死ぬ、男にとって何と心強い半身でせうか。(中略) 歛も握ってください、ソロバンも弾いてくれます。男の残した悉くの仕事を勇むでやってくださいというように、女性を男性と並列して、「聖戦」の役に立つ肉體労働や頭脳労働への動員が意図されている。その一方で、「謙譲清楚なること谷間の白百合にも似ていささかの不平もなく」、「気品と従順と風雅と健康とを具えて居る」と、女性には男に対する女らしさも求められている。そして、そのような女性像がアイデンティティーと接続されながら、要求されている。

実は、作者である牛島自身も「婦徳」の言説に抑圧されていた。「満洲国」では、指導者の位置に立つ日本人女性の「婦徳」強化が唱えられていた。例えば、一九三八年に日満の国策女性団体が合併して結成された「満洲国防婦人会」大会宣言には、「婦徳を涵養し、悪習や不良の風に染まず、国防のためのしっかりした基礎となり、つよい銃後の力となる」

と、在満女性の「婦徳」が強調されている^④。日満高官の夫人たちはほとんど婦人会に加入していたため、牛島が婦人会の会員として、在満女性の「婦徳」を体得させられたことはじゅうぶん推測できよう。ちなみに、牛島の「二太太の命」（『大陸の相貌』、一九四一年四月）という作品では、国防婦人会の婦人たちとの交流の有り様が描かれている。

戦時下、牛島春子は出産を契機に、自分が産む女性だと改めて意識し、「女」（『芸文』一卷五号、一九四二年四月）という作品を書いた。作中で死産を経験した主人公が、あまり性差に囚われない自分の少女時代を思い出し、「家庭に入ることをしてしないで、すすんで職場を求め信念に身を挺する」と、叔父に教育されたことを回想する。しかしながら、主人公は死産の苦痛の最中に日本連勝のラジオ放送を聞いて突如高揚し、「男が戦場に戦うこと、女が子供を産むこと」と叫び、「生めよ増やせよ」という国策に合致していく。「女」を書いた後も、牛島は女性の恋愛や出産に取材した作品を書いている。例えば、「女の灯」（『満洲公論』三卷三号、一九四四年三月）という小説の中では、出産する友人を訪問した後、「私も女の命のともしびを高くかかげて、根強く生きて行かねばならない」と自分に言い聞かせるような女性主人公の忍耐強さが描かれている。

ところが、敗戦に伴い、牛島はジェンダーのカノンを打ち壊すことから解放感を味わう。そのきっかけは、彼女が「坊主」に男装という姿で、「冒険の旅」を行ったことである。

女が髪を切り落として、ずぼんを穿き、ぼけつとに両手をつっこんで歩きまわる——つまり男を装って歩く、（中略）私はかつて知らなかった、鮮烈な悦びに取り乱してしまった。／生まれるとから私を囚えて金縛りにしてしまった女と云う得体の知れない化物が、その瞬間、私から離れ去り、私ははじめて誕生した本当の人間のよう

に、誇りと悦びに自分が輝きだすのを感じた。（『ある旅』同前、二四九頁）

「ある旅」の冒頭に書かれた「女という得体の知れない化物」という捉え方は、田中益三が指摘するように「戦時体制の日本的婦徳をかたち作るジェンダー的な男の眼差し、それを意識した女としての役割反応の重圧^⑤」と関連している。ソ連軍が満洲に侵攻する時、日本人女性に凄まじい暴行を働いていたため、女性を坊主にさせるのは、ソ連軍の性暴力への対策という意味があった。元日本電報通信社記者の森止水によると、「迫ってくる女性への危険に対して吉林の居留民会が断髪勧告を決意するに至ったのは九月の始めである。一五歳から四〇歳前後の女性はこれによってつぎつぎと丸坊主、男装の姿となった^⑥」。しかし、日本人女性断髪ぐらいで女性性の欠如と認識されるような社会では、夫のいる女性たちは、被害の危険にさらされても、髪を切らずに自分の女性性を武器に、夫の庇護から身を守る。そのような女性たちに対して、「私」は軽蔑的な感情を覚えている。

とうとう髪を切る勇氣を持たなかった二人の仲間の奥さんに、軽蔑するような流し目をくれるのだった。この奥さんたちには夫がある。ついでにそれも私は軽蔑しているのかもしれない。（同前、二四九頁）

牛島の引揚げ小説では、ソ連軍の性暴力が取り上げられていない一方、「筐子」では、友人の家がソ連軍の宿舎になった後、友人の夫とソ連軍との和気藹々の生活が、「民族を超えた友情」と呼ばれている。筐子が台所から出てこないでいると、「ロシアの家庭では夫婦揃って楽しむのに、何

故日本の家庭ではマダムは奥にひっこんでばかりゐるのかと無邪気に問う」というシーンがある。戦後、「被害者」視点での引揚げを語る作品に、国民の目が注がれる時、牛島はナショナルな枠から外れて、ジェンダーの視点から「被害」の内実を見詰めている。ここでは、他民族からの加害を暴くというより、自民族における男性的な抑圧、またそれに甘んじる女性、という問題に焦点が置かれている。

引揚げ女性に関する悲劇は、戦後四一年目になった時、初めて当事者によって告発された^⑦。敗戦の混乱中に始まった引揚げは、前述したように最初は一般の民衆たちを棄民としてその対象から外されていた。そして、兵隊の乱暴を受けた女性たちがようやく帰国できたとしても、彼女たちを待っていたのは、「水際での強制中絶」であった。戦前の「生めよ増やせよ」というスローガンが掲げられた時代では、理由なき中絶は墮胎罪として罰せられたが、戦後「日本人の純血を守れ」、「性病予防」「女性救助」という理由を掲げて、「極秘に」実施された中絶も、やはり国の密命であったことは注目されてよいだろう。引揚げに伴う女性の身体と性のあり方は、ナシヨナリズムの圧力のもとで、内地あるいは家族に排除されている状況にあった。それにもかかわらず、麻酔を掛けられずに手術を受けた女性の中には、「手術が終わると見違えるように明るくなつて。嬉しかったですわね^⑧」という人もいたようである。性的侵害や、自国の二次加害に女性たちが無意識な状況下、牛島の「女という得体の知れない化物」から脱出する意識は、特筆すべきである。

四、主体性を取り戻す

主人公「私」は「アルカリ地帯の町」では、協和会会館へ転がり込み、「ある旅」では、友人の家で寄宿して、またそこから出ていく。「知子」

では、主人公知子が古着を売ったり、街で浮浪したりして、明日も分らぬ生活を過ごしているが、「十字路」では、「死」から立ち直る主人公「私」が、自分の能力で働いて自活する。「疎開列車」、「専用馬車」から、「団体切符」、「難民列車」まで、移動方式が変わるごとに、主人公の立場も次々と変わっていく。敗戦後、「日常」と「非日常」が転覆される中で、日本人が分裂していき、女性が性的な対象とみなされる事態が、牛島の引揚げ小説からは見出せる。しかしながら、主人公の「冒険的」な引揚げは、権力や男性への依存を次第に遠ざけて、自立を求めていく過程として書かれている。

その第一歩は、寄食生活から脱出することである。敗戦後の日常的な食事は、「非日常」として詳細に描かれている。食糧を持たない、家族の人数が多い主人公は、寄食先で厄介者として扱われている。「アルカリ地帯の町」では、主人公が公館に着いたら、子供たちを坐らせて、丁寧に挨拶する。それに対して、梶井夫人は「箒をもって立ったまま黙って私を見下ろしているばかりだった」と、無愛想な様子を隠そうとしない。アルカリ地帯にある公館の前庭は、すべてが野菜畑で、各種類の野菜が植えられているが、事務長夫妻と食事する時のおかずは、朝もお昼も冬瓜ばかりである。事務長夫妻が食事を終えた後、ゆつくりと別の食事を取ることに、主人公はのちに気付いている。

また、「ある旅」では、瀋陽の友人の家庭で寄食生活を送る間にも、不愉快なことが起きている。敗戦前に、主人公が家庭で使い余した食糧や調味料などを友人の家族に届ける時、友人の姑から喜ばれた。しかし、寄食中の奥の部屋での会話を聞いた主人公が、友人の家庭不和の原因が自分にあることを知り、どうしても我慢できなくなる。そして、主人公はそこから感じたストレスと憤りを子供にぶつける。飯台の前に三人の子供が並んで、御飯をよそって貰うのを大人しく待っている姿を見る時、

子供たちを厄介な存在と思うようになる。

ここで描かれている友情、あるいは家族の絆に亀裂が入るほどの食事生活で、日本人が分裂している。それだけではなく、日常のように犯された暴民の復讐のような暴行に対する、仲間たちの対応にも、日本人同士間の冷淡さがありありと再現されている。「ある旅」の主人公が旅行案内の事務所で、団体切符を利用して瀋陽から長春の自宅へ戻っていく旅は、まさしく冒険の旅である。汽車に乗った六人が、何時の間にか一人ばかりの男たちに取り囲まれる。そこで、「積極的」でありながら下手な対応をする仲間が描かれている。「貧相の仲間」は、魯迅の小説を抜き出して、「これは中国の小説だ。魯迅、中国の偉大な作家さ」と紹介して、中国文学への愛好を示そうとする。女の仲間はバッグを開いて見せながら、片言の中国語で「見てごらん。見て頂だい。私錢没有よ。都々的、錢没有よ。」と、お金はないことを急に喋り始める。敗戦後、暴民に対する日本人が、いつもより積極的に彼らの文化を尊重し、彼らの言語を使用し、彼らとの距離を縮めようと努力していることが見出せる。しかし、片言、あるいは「日満合弁語」(ピジン)で話す日本人と、のちに汽車中の国籍が判断できないほど、日本語が上手な男性が登場する物語の展開は、植民地風景の実像でありながらも、長い間、日本語だけで問題無く生活できていた言語環境が、結果的に敗戦後における日本人の不幸を増やすだけの皮肉とも読むことが可能である。

暴民以外に、ソ連兵も避難中の日本人にとっては、恐ろしい存在である。しかし、親しい家族や友人の間ですら、矛盾や揉め事が多く存在するのだから、汽車の中で、集団逃避行の「仲間」同士が、お互いを支え合い助け合う美談話など有り得ない。

私と、貧相なけれど静かな仲間とは、相変わらず、今先の出来事

など忘れ果てた顔で並んで座っていた。気の毒な仲間の女が、見知らぬ男と汽車を降りていく時、私たちは黙って、見送ったように、私はこの仲間が兵隊から通路に荒々しく引き出された時も、他人事のように眺めていたのだし、私が捨て身の戦法で検札を切り抜ける時も仲間は素しらぬ顔でいた。(同前、二五八頁)

途中に主人公は座席で男に財産をチェックされ、ソ連兵に検札されたが、無事にごまかすことができた。団体乗車のために即席で作られた仲間同士は、誰かがあつた時、同じような危険に巻き込まれないように、無関心に、赤の他人のようになる、という希薄な人間模様がともリアルに語られている。

敗戦後、在満日本人は収入がなくなる上、家財も軍や暴民に取られ、衣食住問題の解決さえ困難となっている。特に、夫に頼ることのできない女性は、性暴力の被害のほかに、性を取引する対象にもなっている。

「ある旅」に描かれた、瀋陽から出発する六人の団体には、小柄な奥様風の女性がいた。着物姿のその女性は、財産を求める五六人の暴民に取り巻かれ、裸に剥かれるぐらい財産の所持を調べられた。瀋陽駅を出発した以来泣き続けていた彼女は、いつの間にか泣きやんで、傍にいる中華服の男に寄りかかった姿勢になっている。そして、途中で気安くその男の後ろに付いて、去っていつてしまう。即席に庇護してくれる男性と親密関係を作る女性の「無謀な勇氣」に、主人公は「悲劇を感じ」ながらも、主人公自身が男性の誘惑に、きっぱり拒否することができない時が訪れる。六人の団体がばらばらになり、最後に私と一緒に無事に駅を出たのは「快活な仲間」の青年である。ホームを出て、長春の住宅街に着いたら、自分の家に泊まるよう、彼は主人公へ何度も誘いの言葉をかけている。主人公はそれに対して軽く断わりながらも、実は生計の手段

がなくて、迷い悩んでいる。

私は去っていく彼の、不均合いな青い中華服をみやった。と、不意に、切ないほどの恋情が私の中に燃えあがってきた。足を返して彼に追いつき、優しく抱かれないと激しく願った。彼なしでは、一日として生きていけない女でない、と私は思いつめ動揺し、錯乱した。(同前、二六二頁)

汽車の中で、見知らぬ男性についていく仲間の女性のことを思い出すと、自分の方が不自由だと主人公は思うようになっていく。青年についていかなかったことを悲しみ、悔恨している彼女は、心の中のさびしさを認めている。

また、「十字路」の主人公も男性から誘惑されている。友人の家がソ連軍に接収され、主人公は住宅街を外れた家に身を寄せた。発疹チフスで、命からがら逃れて、仕事を探し始める。日本人居留民会の中に職業相談所が設けられたが、そこにある求人情報は、殆ど「二十六才以下の麗人」「容姿端麗」などの条件で、「日本人の女はもはや商品でしかなかった。肉体との取ひきなしには商談はなりたない」世相である。そんな状況に置かれた主人公が、町の十字路で両替屋をやっている野村という日本人男性に雇われた。野村は大同学院の出身であったが、少しも「建國精神」を持たない拝金主義者である。しかし、政治情勢に敏感に反応する両替の仕事に雇われた主人公は、たくましい能力で、野村の助手として、充分に暮らせる月給をもらうこととなった。そのうちに、恋人になることを持ちかけられる。

「奥さんを、ぼくの恋人だと思っていいるだろうか？」と彼は突然

云った。私は一寸戸惑ったけれど、別に驚かなかった。私にはいつか野村がそう云い出しそうな予感がすこし前からあった。

「それはどういう意味？」何の興味もなく私は答えた。

「奥さんはぼくの暴風的な性格を知らないんですね。」

「知りませんわ。」

「奥さん、御主人は沖繩に征かれたんですね。沖繩は、秘密にさされているけれど、あそこは重油で焼かれたんですよ。」

「私を、もう寡婦だと仰るの？」

「ぼくは見識をもっています。誰にでもこんなことをいう男じゃない。ぼくは奥さんを地獄に突き落とすようなことはしませんよ。」

(中略)

「ぼくが奥さんを雇わなくなってもいいですか？」彼は云った。

(「十字路」同前、二七二頁)

男からの誘惑に、主人公は「明日から私は別の仕事を探さねばなりませんわ」と、妥協せずに断わることができた。主人公が経済的に自立する能力を持つようになり、また、精神的にも男への依存から独立するようになっていくことが見られる。

私はたしかに予感しないことではなかった。それに私は貞操というものをそれほど神秘なものだと思っていない。それは自分に属し、自分の責任において扱われていいものだと考えていた。(中略) 動乱の中で、家も夫も僅かな家財も、夢のように一抛に失ってしまおうと、私は突然、私の一切を取り戻したのであった。それ以来、私は誰かは判らない男を愛して夢の中で涙を流すこともなくなった。私は一切を取り戻した自由への悦びに自ら熱中してしまっていた。(同前、

川村湊は、牛島春子の小説について、「女」という立場も、一種の「植民地」として権力によって支配され続けてきたのであり、「満洲」という場所において、牛島春子の小説はそうした普遍的な、男女の権力（抗争）的な有り方を描いていた」と解説している。戦時下の牛島の「女」という立場が、男権支配に妥協、忍従していくことが多いのに対して、戦後の引揚げ作品では、「女」という得体の知れない化物」から脱出するのも、男性の誘惑を拒否するのも、明らかに男権へ抵抗し、主体性を取り戻す意思が勝っている傾向と見なすことができる。

まとめに

「アルカリ地帯の町」と「ある旅」という両作を軸に、牛島の引揚げの様相を見てきた。戦後の一時期、被害者としての苦難物語の言説に依りて、引揚げ作品が次々と、引揚者の語りによって書き綴られている。夫が一九四七年に復員するまで生死不明で、三人の子供を日本に連れて引揚げた牛島の状況は、並大抵ではなかったはずであるが、牛島の引揚げ作品には、重苦しい苦痛が強調されていない。無論、それは彼女が属していた特権階級の背景がなければ、成り立たないであろう。

「指導民族」の立場に立つ「女性」の意識を持った牛島春子は、「満洲国」の瓦解を目撃し、同時に彼女を束縛する「満洲国」官吏夫人の重い身分から解放される。彼女が信じ込んだ理念や、忍従してきた規範が崩れた時、ショック以外に、かつてなかった自由ないし放任を味わうことが可能になる。それは彼女が「ある旅」に書き付けたように、「敗戦の、満洲の私たちが置かれている世界からは、もはや社会という概念は消失

している。私たち日本人は、一人一人がばらばらに、自分だけが必死に考えればよい。秩序も、規律も、おきてもない」。

また、男に頼れない状況のおかげで、彼女は自立するようになり、ジェンダーに囚われない解放感を体験することができた。戦後、牛島は「自分を書く」（『西日本新聞』一九八〇年二月二日夕刊）というエッセイで、「女」としての恥ずかしさをこう言っている。「私には自分が女であるというところにある気羞（はず）かしさがつきまとい、それがどこから来るのか自分でもまだよくわからない。気取っていえば「女にうまれたのでなく、女にさせられてしまった」からかもしれない。その意味はいろいろあるけれど、まず卑俗に言えば、男がそこにいると、自分は自然と女になっている」。

牛島は身分とジェンダー規範から解放されて以降、自立し、自主的に身体や性を支配する主体性を取り戻すことができた。敗戦は、植民地における女性、特に敗戦国の日本人女性にとっては、過酷な災難である。それと同時に、自分の置かれた状況を自覚し、その原因を反省する切っ掛けにもなる。牛島は、反省している一人である。

また、彼女の引揚げ作に登場する、子供たちがソ連軍に可愛がられたシーンや、汽車の中で日本人が満人から助けられたシーン、また、主人公が満人ばかりの電車に一人で平気に乗ってしまうなどの断片も存在する。「満洲国」が壊滅してはじめて、民族を超える友情が感じられるような描写は、女性文学の視点と離れている理由から本稿では論じないが、それも牛島の引揚げ文学の特徴の一つと考えられる。

附記

本稿は二〇一六年三月二二日に立命館大学国際言語文化研究所主催の

国際シンポジウム「トラベルライティング——他者への視線」で発表した原稿に加筆したものである。本稿の作成に当たり、ご指導いただいた中川成美先生、また、日本語校正においてご助力をいただいた泉谷隣氏に感謝申し上げます。

注

- ① 一九四九年日比谷出版社によって出版された、藤原ていの『流れる星は生きている』は、映画化もドラマ化もされ、当時大きな評判を呼んだ。
- ② 朴裕河「引揚げ文学に耳を傾ける」『立命館言語文化研究』（二四巻四号、二〇一三年三月、一一七頁）。
- ③ 朴裕河「引揚げ文学」を考える『日本近代文学』（第八七集、二〇一二年一月、一一八・一二〇頁）。
- ④ 牛島春子（一九一三年二月二五日・二〇〇二年二月二六日）は、日本で共産主義運動の挫折を受け、「満洲国」の官吏である牛嶋晴男（一九〇九年三月一六日・一九七二年一月二二日）と結婚して、一九三六年秋に満洲へ渡っていった。牛嶋晴男は、一九三五年一〇月「満洲国」官吏の育成を目標とする大同学院を卒業。一九三六年、牛島を伴い「満洲国」に正式赴任する。「満洲国」では、奉天省属官、龍江省拜泉の第四代目の副県長、総務庁企画処参事官、「満洲国」協和会中央本部参事官などの官職を経て、一九四四年三月召集を受けて入隊。一九四五年宮古島で終戦を迎え、一九四七年日本に復員。
- ⑤ 牛島春子と牛嶋晴男の年譜は、坂本正博によって作成されたものを参考にしている。（<http://www.k3.dion.ne.jp/~scarabee/sukain-a-u.html>）最終アクセス日は二〇一六年一〇月一日である。また、引揚げの経緯は、牛島のエッセイ「三児を連れて」『牛島春子作品集』（ゆまに書房、二〇〇一年九月）をも参考にしている。
- ⑥ 五つの引揚げ作品の中で、「知子」は、川村湊監修の『牛島春子作品集』（ゆまに書房、二〇〇一年九月）に収録されていない。また「ある旅」は、『コレクション戦争と文学9 さまざまな8. 15』（集英社、二〇一二年七月）に再収録。本稿における本文引用は、川村湊監修の『牛島春子作品集』

集』によっている。「／」は改行を示し、傍線は論者による。ちなみに、「知子」以外の四つの小説は、「私」という一人称で語られており、各篇に登場する友人、また友人の夫の名前は、それぞれ違うが、同一人物と考えられる。

- ⑦ 成田龍一「引揚げ」と「抑留」倉沢愛子等編『アジア・太平洋戦争4 帝国の戦争経験』（岩波書店、二〇〇六年二月、一八七頁）。
- ⑧ 田中総一郎「満鉄終焉期」『秘録大東亜戦史 満洲篇』（富士書苑、一九五四年六月、一六〇頁）。
- ⑨ 主人公が特別扱いされて疎開することは、第三人称で書かれた「知子」では、「知子たち応召家族が疎開する時は一年分の給料がわたされてゐたのであるから、あと一年分は貰ふ権利がある」と言及されている。
- ⑩ 第九条条項は「日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルヘシ」という内容である。
- ⑪ 「第三章引揚げの性格と指導精神」『引揚げ援護の記録』（引揚げ援護庁、一九五〇年三月、一〇頁）。
- ⑫ 「第二章引揚げの開始」『引揚げ援護の記録』（前掲書、一頁）。
- ⑬ その「邦人送還問題」の交渉は一九四六年九月八日の『東京朝日新聞』（朝刊一頁）に掲載されている。
- ⑭ 末次玲子「王道楽土」のジェンダー構想」早川紀代など編『東アジアの国民国家形成とジェンダー』（青木書店、二〇〇七年七月、三〇二頁）。
- ⑮ 田中益三「長く黄色い道——満洲・女性・戦後」（せらび書房、二〇〇六年六月、九二頁）。
- ⑯ 森止水「古都吉林」『秘録大東亜戦史 満洲篇』（富士書苑、一九五四年六月、四一九頁）。
- ⑰ 『戦後50年引揚げを憶う…証言・二日市保養所』（「引揚げ港・博多を考える集い」編集委員、一九九八年七月）で集められている資料と新聞記事を参考にしている。例えば、六十頁「41年目の証言 引揚げ女性の悲劇」『毎日新聞』（一九八七年八月一六日）の「極秘に中絶すべし」密命」一篇では、「引揚げ女性については、老若を問わず、性病及び妊娠を実施、性病治療、妊娠も隔離、極秘裏に中絶すべし（中略）不法妊娠中絶の

数は千件を下らないと推定される。この件については、厚生省よりカルテなど診療の記録は一切残してはならないとの厳命があった。従って公式記録は全然残されず……」と、当時九大医学部産婦人科の庶務を担当していた岩崎正が言っている。

⑱ 前掲『戦後50年引揚げを憶う…証言・二日市保養所』（「引揚げ港・博多

を考える集い」編集委員、一九九八年七月、六十一頁）、「41年目の証言 引揚げ女性の悲劇」『毎日新聞』（一九八七年八月一六日）「手術 娘隠した母も…」という記事では、手術を受けた女性の証言を掲載してある。

（本学大学院博士後期課程）